人文学部における演劇教育の試み――「アタシノアカシ」を通して

中山文・小原延之

はじめに

本文は 2017 年から始まった「アタシノアカシ」上演をゼミ担当者中山と実演指導者小原が振り返ったものである。二人の合作は今年で 5 年目になった。その間、人文学部学生にふさわしい演劇教育の方法を模索してきた。

Ⅰ・「コロナ禍と教育演劇」

中山　文

2022 年 1 月、4 年次生最後のゼミ授業。久しぶりに全員が揃い、一人ずつゼミへの感想を語ってもらった。「楽しかった」「達成感」「仲良くなれた」……コロナのせいでほかに楽しいことがなかったからか、自分たちの演劇作品を一から作り上演までこぎつけた経験は大学時代の輝かしい思い出になっているという。私もはっきりと覚えている。ようやく対面授業が始まりマナビーホールに集まった彼らが、舞台の上でいきいきと動きだしたあの瞬間を。上演という共通の目標を与えられると、自由闊達にアイデアを出し合い、どんどん動き回る学生たち。積極性があるから身体が動くのではない。身体を動かすことで積極性が生まれるのだ。いつもは奥ゆかしい人文学部生が「巻き込まれ力」を発揮した瞬間だった。

2021 年 1 月の本番は無観客で行うしかなかった。だが、2 月には『アタシノアカシ戯曲アンソロジー２』を編み、全員の戯曲を残すことができた。さらに翌年 1 月には上田ゼミ生による撮影と動画編集、宇野ゼミ生による BGM の作曲、長谷川ゼミによる合評会が開催された。なんと光栄なこと！自分の作った言葉が他者の口から発せられる喜び、それがオリジナルな音楽とともに動画に残される喜び、その上それを他ゼミの人たちに見てもらい批評の言葉をもらう喜び。今年の 4 年次生はこんな素晴らしい経験ができた、幸運な学年だった。

さて、2022 年度の 3 年次生である。前期から対面授業が始まったが、先行きの不安もある。昨年同様上演は後期の 1 回だけとし、前期から時間をかけて全員が上演可能な戯曲を書くことを目標とした。15 回授業の具体的な内容は以下の通りである。

＜前期＞第 1 -3 回自己紹介、第 4 回「絵本のサンタクロース」（佐藤柾季作）リーディング、第 5-7 回明石題材の共有、第 8-10 回あらすじ紹介、第 11 回「みなももももみな」（棚瀬美幸作）リーディング、第 12 回小原先生への Q＆A、第 13-15 回自作戯曲リーディング。

授業の工夫としては、以下が挙げられる。①自己紹介に演劇ゲームを加えて、ゼミ内に親密な関係性を築く。②先輩の作品をリーディングし、自分たちの目標レベルを確認する。③明石についての題材を持ち寄り、発表して共有する。魚の棚、天文科学博物館は常連だが、

今回は不登校児のフリースクールが紹介され、それに啓発された作品が複数生まれた。④タイトル、登場人物、あらすじを 400 文字で書き、発表。この時に同級生から新たなアイデアをもらうことも多かった。⑤プロの書いた戯曲は背景や人間関係がセリフの中から浮かび上がってくる工夫がされていることを確認する。⑥戯曲を書く上で不明なことを質問表にして提出し、小原先生に答えていただく。⑦小原先生に初稿を読んでいただき、具体的な修正ポイントを指摘してもらう。⑧小原先生からのコメントをもとに、修正稿を書く。⑨発表のたびに、全員の感想を課題とし、ドットキャンパスを通じてフィードバックする。

＜後期＞第 1 回スケジュール確認、第 2-4 回ビブリオバトル、第 5 回動画配信「アンティゴネ」観劇、第 6-8 回修正稿リーディング、第 9 回投票で上演作品の決定・役割分担・班分けなど、第 10-15 回班ごとに分かれて稽古 6 回（うち 2 回はマナビーホールを使用、照明や音響の使用方法を学ぶ)。

授業の工夫としては、以下が挙げられる。①ビブリオバトルは自己紹介とともに、プレゼンテーションの方法を考える機会となる。②発表のたびに、全員のコメントを課題とし、ドットキャンパスを通じてフィードバックする。③授業でもマナビーホールを使用することでサイズ感に慣れるとともに上演への意欲を掻き立てる。④照明、音響機材の使用方法を 4 年次生に指導してもらう

後期の演技指導はもちろんのこと、前期の内容についても演劇の現場を知らない中山には担当できないものがある。特に、初稿段階から小原先生の的確なコメントをもらうことで、多くの修正稿が格段にレベルアップしたことを挙げたい。リーディングに際し、修正点を説明する彼らの口ぶりには、プロの目が入っているという自信を感じさせた。

後期授業については、例年キャスト・スタッフの役割分担が非常に難しい。これが一方的に押し付けられたのでは学生もやる気がでない。皆が納得するような落ち着き先を見つけるのに時間がかかり、小原先生の経験に頼ることもしばしばだった。だが今年は小原先生から「プロデューサーがプロジェクトの要。複数でもよい」と言われ、一人の女子学生がチーフプロデューサーに名乗りを上げた。彼女にサブを依頼されて快諾した 2 名の男子学生とともに機敏なプロデューサーチームが誕生した。またＨＰや撮影などこれまでにはなかった役割が学生側から提案され、意欲の高さを感じさせた。コロナ禍 2 年めの「アタシノアカシ」は、先輩たちに勝るとも劣らぬ素晴らしいものになりそうな予感がしている。ぜひ美術班力作のスワンボートを多くの人に見てもらいたい。

Ⅱ・中山ゼミの教育演劇に携わって

上演指導・小原延之(劇作家・演出家)

2017 年度、中山文教授からゼミ生による演劇発表の指導のオファーを受けてから 2021 年度までの 5 年間ファシリテーターを務めた。私は教育現場においてアウトリーチ・プログラムを実践してきた経験から、舞台芸術を専門としない学生たちが自発的にどのように

作品を創作していくのか、またその活動がどのように学生生活に影響を及ぼし、その後の人生の位置づけとなりえるのか、非常に興味があった。

今年度(2021)の発表は、感染症対策のため約 2 カ月の延期となり、現時点では発表されていないのだが、それまでの中山ゼミの作品創作の変容を振り返る。

〇テーマ「アタシノアカシ」について。

初年度(2017)は 2 年次生と 3 年次生の合同で「居場所」というテーマにした作品創作になった。この「居場所」と題するテーマは普遍的で創作にはうってつけといってよい。しかし居場所というテーマに対し、場所そのものを具体的な「空間」と捉えるか、観念的な場所として避けるかという幾つかの選択で、多くの学生が観念的なモチーフを持ち出す傾向がみうけられた。

2 年次生はタイムカプセルをモチーフにし、居場所を過去の記憶とした。3 年次生にいたっては上演自体は成功したものの、スタート時、猟奇的な内容の戯曲で企画が進行してしまい、グループのモチベーションが上がらず、その結果、作家が交代するケースとなった。

中山教授はこの教訓を生かし、テーマはもう少し限定的で具体的なものが良いのではないかと「アタシノアカシ」という明石をテーマとする作品創作に切り替えることになる。この「アタシ」＝「個人」と「アカシ」＝「明石」を融合した響きの良いネーミングは学生たちにとって、地に足のついた作品創作の手がかりになった。

マナビーホールで上演した「てつかみシェアハウス(2018 年)」からは学生の創作に明石市の特徴を織り交ぜることが必然となり、これは一種の縛りでもあるのだが、同じ情報を共有する一般の観客に対して強度のある作品に仕上がる。

戯曲による表現は、もともと個人が抱える内的な葛藤が伴わないと書き始めることがとても難しい。だが、このテーマは、そういった学生たちに地域を調べさせ、創作意欲が湧く契機を与えることに関与している。戯曲を書くのに迷ったら、史実を調べたり、現地に訪れたり、とにかく動き出せば良いのだ。

「アタシノアカシ」は 2018 年度以降シリーズ化する。

〇年間スケジュールに関して

2018 年度には、年度の頭から戯曲執筆、前期終了時にマナビーホール上演。後期は再び戯曲執筆の後、学生たちの環境を配慮し、舞台上演ではなく簡素化したリーディング公演という形式で落ち着いた。年間で 2 公演打つスケジュールは、前期は学生同士の結びつきを強くし、後期に前期の反省を踏まえて優れた戯曲を書き上げることを可能とした。印象的なのが、前期に執筆意欲があまりなかった学生が、前期の上演発表で役者なりスタッフなりのワークに刺激を受け、後期に優れた短編作品を発表したことである。とりわけ 2019 年度の前期にコミカルな「オオダコと魔法のたこつぼ」に出演していた田中夏帆さんが繊細な男女の機微を描いた「蝉時雨」を執筆したのが良い例であるといえる。

2020 年度は、コロナ禍のため上演が難しく、後期に無観客動画撮影という形式となった。無観客の上演は、やや緊張がなく、故に達成感が乏しい上演ではあったが上田ゼミの撮影協力によりクオリティの高い映像作品に仕上がった。収録された作品は、後に上映による発表がなされた。また前期の上演不可能な状況を利用して、全員が戯曲執筆、長いスパンを推敲する期間にあてたことで多くの短編戯曲が書き上げられ、「アタシノアカシ　戯曲アンソロジー2」に集録されることになる。

2019 年度まで続いた「前期の上演、後期のリーディング」と、コロナ禍が導いた「後期のみの上演」は、どちらも利点があるといえる。そこで中山教授は、全ての学生に執筆をさせて推敲する期間の潤沢さを考慮し、後期のみの上演が望ましいと判断した。

〇戯曲創作について

中山ゼミにおける学生たちの戯曲執筆能力は向上しているといえる。

中山教授の指導はもとより「アタシノアカシ」がシリーズとして定着したことによって、学生によって書きやすい環境が与えられ「アタシノアカシ　戯曲アンソロジー」としてアーカイブ化したこともものちに反映されるだろう。作品のモチーフとなる地理的なロケーション(魚の棚商店街、天文台)は重複することが考えられるが、年代の移行によって、常に若者の感性が明石を新鮮に描いていくだろう。

〇スタッフ・ワーク

演劇の発表会というと、主役、脇役、その他大勢というような演劇特有の不平等さを想起させるが、演劇教育というものは、作家や出演者以外にも上演に関わる一人一人が、表現者として主体的に携わることができる。スタッフ・ワークに関しては、一貫してすべての学生に活躍の場を提供してきたといえる。

音響、照明、衣装、美術にしても重要な表現者である。また複数人で担当するプロデューサー＝プロジェクトリーダーはイベント自体を企画する重要な役回りとなる。

2021 年度の創作過程では、動画撮影、ホームページ作成を得意とした谷日向子による稽古場動画とその配信が素晴らしい。SNS 発信はグループの活性化、モチベーションアップにもつながることになった。

〇発表形式

中山ゼミの上演会は、当初より一貫して司会(MC)が進行し、ゲストを招いたアフタートークをする。演劇に精通した伊藤茂名誉教授による専門家のコメントは重要である。また 2019 年度の上演会では、作品のモチーフとなった明石天文科学館館長を招いた。地域をモチーフに取り入れた「アタシノアカシ」シリーズとしては、地域のキーマンを招くことは理想的である。演劇創作が社会性を伴うことを学生たちが身をもって経験することになるのだ。

○上演後について

演劇教育を受けた学生が、どのようにその経験を後の人生に活かしているか、つぶさにリサーチはできていないが、なにより学生生活の中で、演劇の上演がひとつの成功体験として、自己の価値を高める契機になることは間違いない。さらに出演を体験した学生は、次年度に控える就職活動などで必要とされる人前で堂々と振舞うスキルを養うことになる。
演劇教育は、発表とその過程で、学生生活そのものを潤し、創作過程で人間関係を育み、緊張感をもった上演を乗り切ることで大きな達成感を味わうことができるのだ。

○中山ゼミの教育演劇

数年継続された中山ゼミの演劇発表は、年度を重ねることによってノウハウが蓄積され、その価値を高めることに成功してきた。昨年度からコロナ禍ということもあり、健全な上演が困難ではあるが、その分、潤沢な時間を戯曲創作に割り振り、その成果も顕在化しようとしている。

Ⅲ・総括

中山　文

感染予防の観点から今回の観客は最大 100 名としていた。前もって観客リストを作り、受付で消毒、検温、パンフを置いた席に座ってもらう……考えうる限りの準備はしていた。だが、本番 1 週間ほど前からまったく観客が集まりそうにないことがわかってきた。このご時勢なので、積極的な動員はしにくい。だから、1 人につき 2 人ずつ友達を呼ぼう。ご家族の方がおいでになることもあるだろうと駐車場の予約まで考えていた。が、オミクロン株の急激な蔓延により、本番 2 日前に皆で話し合って延期を決定した。その 5 分後には HP に上演延期の告知がアップされた。3 月 1 日からは彼らも就職活動が始まる。その合間を縫って、上演は 3 月 28 日に決めた。こういう時も LINE の集計機能は便利である。

筆者は、ここまで作り上げてきた過程にこそ意義があると割り切っている。いざとなれば昨年同様に無観客でもかまいはしない。それでも上演までもっていった経験は大学時代の輝かしい思い出になることを、4 年次生の先輩たちが保証してくれるだろう。

with コロナ時代には、感染対策を講じながらできることを考えることが重要になる。努力する過程が大切だ。でも無事にやり終えることができたら、何よりも素晴らしい。私たちは今、「アタシノアカシ」を通して、新しい生き方・考え方を OJT--「On the Job Training」--している最中なのである。

本研究は「JSPS 科研費 19K12491」及び 2021 年度人文学部研究推進費「映像制作を用いた人文学的教育に関する整備発展」、同「コロナ禍における地域の記憶の継承に向けた実践的研究－地域研究センター明石ハウスを拠点として－」の助成を受けておこなった。